

2016年 1月 18日

2015年度スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団助成事業  
プロジェクト報告書

氏名 馬淵 明子  
所属機関・役職 独立行政法人国立美術館 国立西洋美術館 館長  
助成番号 15-35  
申請主題 国際シンポジウム「北欧の近代美術とジャポニスム」

下記のとおりご報告申し上げますのでご査収ください。

記

1. 開催日時・期間 2015年10月31日(土) 10~18時 1日間

2. 開催場所 国立西洋美術館講堂(東京都台東区上野公園7-7)

3. 主催者・プロジェクト参加者

主 催: 国立西洋美術館

参加者: 講演者として、国内4名、北欧3国より5名招聘

馬淵明子(国立西洋美術館 館長)

佐藤直樹(東京藝術大学美術学部芸術学科 准教授)

萬屋健司(山口県立美術館 専門学芸員)

荒屋鋪透(ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館 学芸部長)

スサンナ・ペッテルソン(フィンランド国立アテネウム美術館 館長)

アンナ=マリア・フォン・ボンズドルフ(同 主任学芸員)

ヴィーダル・ハレーン(オスロ国立建築デザイン美術館 館長)

ヴィーベケ・ヴォラン・ハンセン(同 学芸員)

ピーダ・ナアアゴー=ラースン(コペンハーゲン国立美術館 コレクション・研究部長)

4. 目的

北欧の近代美術の発展において、日本の美術や文化がどのような役割を果たしたのか、というテーマのもとに、北欧ならびに日本の西洋美術・ジャポニスム研究者が発表・討論を行い、交流を図ることにより、新たな知見を得ると共に、北欧におけるジャポニスム研究推進に寄与することを目指す。

5. 内容

パリとロンドンで始まったジャポニスムがどのように北欧に伝播し、それを消化したのか、そして、ヨーロッパのジャポニスムの流行のなかで、北欧諸国のジャポニスムがどのような位置を占めるのが確認された。すなわち、パリで学んだ北欧の美術家たちが帰国後、パリの最新の美術動向を自国に伝える上で、同時にジャポニスムも伝播していったことに焦点を合わせて論じられたのである。一方で、独自のコレクションを形成したフィンランドやデンマークのコレクターもおり、パリを経由した間接的な影響だけでなく、日本美術そのものの影響も見逃せないことも史料を交えて指摘された。また、北欧では自然への親近感をもとより土着の文化として存在してい

たことから、同じような自然観を持つ日本美術に触れて、北欧のジャポニスムが独自に発展していったケースも多く、発表者から指摘されたのは興味深い論点であった。北欧のコレクターの所蔵品だけでなく、パリやドイツなどで入手しやすかった浮世絵や版本も挙げられたが、同時にパリでジークフリート・ビングによって出版された『芸術の日本』という挿図入り国際専門誌の類も大いに参照されたことも見逃してはならない。また、北欧の美術理論家としては、デンマークの美術評論家カール・マスンが、自国のみならず北欧全体に影響力を持っていたことが明らかにされた。政治的には、北欧諸国はヨーロッパの列強に囲まれていたためナショナリズムの形成が必要であった時期に、北欧神話と結び付いた独自のジャポニスムが展開されたという点も、重要な特徴として改めて確認された。

## 6. 告知手段

\*ホームページ掲載（国立西洋美術館、美術史学会、ジャポニスム学会、文化資源学会、ノルウェー王国大使館）

\*チラシ配布（美術史学会、ジャポニスム学会等）

## 7. 来場者数

聴講者 121名、関係者 25名、スピーカー9名

## 8. プロジェクト開催の成果

これまで、北欧各国が単独で論じられる場はあったものの、北欧全体にわたる視点をダイナミックに得られたことはなかったため、北欧4か国を網羅した研究発表の場となった今回のシンポジウムは貴重である。ジャポニスムの中心地であるパリから北欧に伝播していった経緯と、北欧に土着の文化的特色である自然との調和が、パリのジャポニスムと比べてどのような姿に変貌していくのか、多くの画像とともに確認できたことで、今後の研究に大きな展開をもたらしてくれることは間違いない。シンポジウムで挙げられた作品と討議内容には、ジャポニスムという流行の美術様式を利用しながら、国家を超えた北欧のアイデンティティを作り上げた状況がまざまざと描き出されていたのである。これこそ、このシンポジウムが目指した成果であり、北欧のジャポニスム研究が、ここから本格的に始まると言っても過言ではないだろう。

## 9. 他の助成および後援団体

他の助成： 吉野石膏美術振興財団、野村財団、ポーラ美術振興財団

後援： ジャポニスム学会、美術史学会

協力： ノルウェー王国大使館、フィンランド大使館、フィンランドセンター、デンマーク大使館、S2株式会社

## 10. プロジェクトの総括と今後の展望

今回初めて日本で開催された北欧のジャポニスムに関する本シンポジウムは、フィンランド、ノルウェー、デンマークから計5名の発表者を迎えた画期的なものであった。

今後は、報告書を英語と日本語の二カ国語で出版することで、シンポジウム全体の成果を海外の研究者に向けて発信していくことが最重要課題となる。そのために、現在、発表原稿を基にした報告書を準備中である。その中でも、日本人の研究者から見た北欧のジャポニスム観が、新たに西洋美術研究の枠組みのなかで検討されることが強く望まれ、それはまた、北欧の発表者たちが望んでいたことでもあった。国際化が進んだとは言え、まだ日本からの発信は少なく、日本人のジャポニスム観がまさに問われている。シンポジウムでは取り上げることのできなかった北欧の美術家に関する研究、あるいは北欧の博覧会において北欧の美術家たちが具体的に目にするのできた日本美術を跡づける調査も急務であることが課題として見えてきたことも成果であった。

## 11. 資料（添付の通り）

\*当日配布プログラム（シンポジウム PR チラシを一部修正）

以 上



# 国際シンポジウム「北欧の近代美術とジャポニスム」

International Symposium "Modern Art and Japonisme in the North"

日時： 2015年10月31日(土) 10:00~18:00

会場： 国立西洋美術館 講堂

聴講無料、定員130名(事前申し込み不要、当日9:30受付開始)、日英同時通訳

19世紀後半にジャポニスムが西ヨーロッパ、アメリカで広い文化芸術活動となったことはよく知られていますが、北欧の近代美術にとってもそれは重要なものでした。今回初めて、北欧におけるジャポニスムの諸相を、日本と北欧の研究者が集まって検証します。

ウーダ・クルーグ《日本の提灯》(部分) 1886年 オスロ国立美術館 Oda Krohg, *A Japanese Lantern* (detail), 1886. The National Gallery, Oslo ©Photo The National Gallery, Oslo / Jacques Lathion

## プログラム / Program

<午前の部> 司会：陳岡めぐみ

<Morning Session> Moderator: Megumi Jingaoka

基調講演 馬淵明子 (国立西洋美術館 館長)	10:00-10:30	Keynote Lecture Akiko Mabuchi, Director General, The National Museum of Western Art
ジャポニスムの発信地パリと受信地北欧		Paris, a Transmitter of Japonisme, and the North as Its Receiver
研究発表1 スサナ・ペッテルソン (フィンランド国立アテネウム美術館 館長)	10:30-11:05	Paper 1 Susanna Pettersson, Director, Ateneum Art Museum, Helsinki, Finland
美術コレクター ヘルマン・フリチョフ・アンテル — パリから日本へ		Art Collector Herman Frithiof Antell — Home in Paris, Abroad in Japan
研究発表2 アンナ=マリア・フォン・ボンズドルフ (フィンランド国立アテネウム美術館 主任学芸員)	11:05-11:40	Paper 2 Anna-Maria von Bonsdorff, Chief Curator, Exhibitions, Ateneum Art Museum, Helsinki, Finland
草の葉から聖なる大自然まで — 北欧美術における自然観の変化		From the Blade of Grass to Sacred Wilderness — Changing the Concept of Nature in Nordic Art
休憩	11:40-11:50	Intermission
研究発表3 ヴィーベケ・ヴォラン・ハンセン (オスロ国立建築デザイン美術館 学芸員)	11:50-12:25	Paper 3 Vibeke Waallann Hansen, Curator, Exhibition and Collections, The National Museum of Art, Architecture and Design, Oslo, Norway
北欧の自然をデザインする — 北欧美術に見る琳派の美学からの示唆 1880-1918		Designing Nordic Nature — Hints of Rinpa Aesthetics in Nordic Art 1880-1918
昼食	12:25-13:25	Lunch

<午後の部> 司会：杉山菜穂子

<Afternoon Session> Moderator: Naoko Sugiyama

研究発表4 佐藤直樹 (東京藝術大学美術学部芸術学科 准教授)	13:25-14:00	Paper 4 Naoki Sato, Associate Professor, Tokyo University of the Arts
ヘレン・シャルフベックとジャポニスム		Helene Schjerfbeck and Japonisme
研究発表5 ヴィーダル・ハレーン (オスロ国立建築デザイン美術館 館長)	14:00-14:35	Paper 5 Widar Halén, Director, The National Museum of Art, Architecture and Design, Oslo, Norway
ジャポニスムとノルウェーの新しいナショナル・アイデンティティ		Japonisme and a New National Identity in Norway
研究発表6 萬原健司 (山口県立美術館 専門学芸員)	14:35-15:10	Paper 6 Kenji Yorozuya, Curator, Yamaguchi Prefectural Art Museum
19世紀末デンマークにおける日本美術受容 — カール・マソン著 <i>Japansk Malerkunst</i> (『日本の絵画芸術』)を中心に		Reception of Japanese Art in Denmark in the late 19th Century, Based on <i>Japansk Malerkunst (Art of Japanese Painting)</i> by Karl Madsen
休憩	15:10-15:30	Intermission
研究発表7 ピーダ・ナアアゴー=ラーソン (コペンハーゲン国立美術館 コレクション・研究部長)	15:30-16:05	Paper 7 Peter Nørgaard Larsen, Director, Collections and Research, Statens Museum for Kunst, Copenhagen, Denmark
自然への新たなアプローチ — デンマークの視覚芸術におけるジャポニスム 1880-1910		New Approaches to Nature — Japonisme in Danish Visual Art 1880-1910
研究発表8 荒屋鋪透 (ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館 学芸部長)	16:05-16:40	Paper 8 Toru Arayashiki, Chief Curator, The Pola Museum of Art, The Pola Art Foundation
スウェーデン、北欧のジャポニスムと芸術家村グレー — カール・ラーションからムンクまで		Sweden, the Nordic Japonisme and the Artists' Community, Grez-Sur-Loing — From Carl Larsson to Edvard Munch
休憩	16:40-17:00	Intermission
全体討議 司会：宮崎克己	17:00-18:00	Panel Discussion Moderator: Katsumi Miyazaki

主催 国立西洋美術館

会場アクセス <http://www.nmwa.go.jp/jp/visit/map.html> 問合せ先 ☎ 03-3828-5131

後援 ジャポニスム学会 美術史学会

助成 スカンジナビア・ニッポンササカワ財団 公益財団法人 ポーラ美術振興財団



公益財団法人 吉野石膏美術振興財団 公益財団法人 野村財団 NOMURA 野村財団

協力 ノルウェー王国大使館 フィンランド大使館 フィンランドセンター デンマーク大使館 S2株式会社